対談

沖縄における観光客1000万人時代のインフラ整備

対談者　琉球大学　名誉教授・文学博士　高良 倉吉
内閣府沖縄総合事務局　次　長　尾澤 卓思

沖縄県では、観光を県経済のリーディング産業と位置づけて、平成33年に観光客1000万（うち国外客200万人）の達成に向け、観光振興に力を入れているところです。沖縄総合事務局開発建設部では、「沖縄における観光客1000万人時代のインフラ整備」を提唱しています。沖縄観光振興に貢献するインフラ整備を六つの分野のシナリオで、観光の観点から横串を刺した形で整理し、インフラの総合力の重要性をわかりやすくとりまとめ、公表しています。

「沖縄観光とインフラ整備」について、首里城等の委員としてインフラ整備に携わってこられた琉球大学名誉教授の高良先生と尾澤沖縄総合事務局次長との対談を行いました。

首里城復元の合い言葉

○尾澤　首里城の復元は、琉球の一番大事な心の部分、魂の復元と思うのです。復元に向けたこだわりについて、まずお話しをいただきたいと思います。

○高良　首里城の復元は長い年月をかけて、総合事務局中心に歴史や建築の専門家など様々な方が連携して「琉球国のシンボルを蘇らせる」見事なプロジェクトです。戦争で失われた琉球王国の中心であり、象徴的な存在である首里城の歴史や文化を含めた復元です。従って当然クオリティの高い物で、時代考証をして様々な意見を加えて、後世の批判に耐えうる内容の復元を目指すのが合い言葉です。このために様々な資料を検討し、様々な海外調査、事例調査もしましたし、そういう点では恐ろしく手間暇をかけたプロジェクトだったと思います。

戦争で破壊された首里城ではなく、現役だった時代の首里城を復元する、それがテーマでした。目標は非常に高かったです。そのために首里城に関する様々なデータ等を収集し、まさに本格的な首里城研究なしには達成出来ないことでした。

観光施設としての首里城

○高良　首里城正殿は徹底的に細部にこだわりました。しかし、そこを訪れる方の中には、障害をお持ちの方もいらっしゃいます。当然往時の首里城はバリアフリーではありませんから、そういった方々のためにどうするか、かなり議論になりました。バリアフリーにするとアレンジすることになるからです。でも、我々としても最終的にはバリアフリーにすべきだと言うことで、裏の方の壁を切って車いすで上がれるようにしました。

また、安心安全についても議論しました。一つの例を挙げますと北殿の北側に結構高い城壁があって、そこは様々な土木関係調査の成果を見ても、非常に脆弱な場所なんです。王国時代の記録をみてもしばしば地震で崩れていました。最終的にそこは内側に擁壁を作って安全対策を施して往時と同じような位置に城壁を積んで立ち上げてある。そういう工夫もしてあります。

○尾澤　そういう意味ではまさしく施設と観光の融合。それを繋いでいるのが、現代の技術であって、現代の技術をうまく使うことによって両方の目的を達成できるようにしたということですね。

本物の展示と情報発信

○尾澤　本物の良さをどう観光客の皆さんに伝えていけるか、本物を伝える工夫とか、これだけ違うという伝え方はありますか。

○高良　様々な立場の人たちが知恵を出し合って非常に良い形で推進されたプロジェクトですので、成果を来園者に理解していただきたくて、解説を多くしています。戦争で破壊され復元された施設にこれだけ豊富な解説は本土には無いと思います。結構あちらこちらに解説があります。何しろ戦争で失われて相当な間隔をおいて復元されましたので、これは何という建物でどういった用途の建物であったかを解説しています。解説計画もかなりしっかりしていますが、まだまだ不十分だと言う意見もあります。

首里城にはアンケート等による調査データがあります。それを見ると開園当初一番多かったのは、映画のオープンセットの様で、「奥行きがない」、「生活をしていた・人間が感じられない」というものでした。奥行きがないことについては、一部開園した1992年以降次々と新しい建物を復元していますから、確実に充実していると思います。昨年は黄金御殿が復元され、まだまだ整備する計画はあります。

また、生活感については、首里城で行われたイベントを再現しています。城内の聖地を巡拝する「百人御物参り（もも

琉球大学　名誉教授・文学博士　高良 倉吉

そおものまいり）」を再現したり、定期的に芸能を披露してみたりと、いろんなことをやっていますが、まだまだ発展途上だと思います。今後どういうことをしていけば、首里城に生活の匂いがするのかという課題は残ります。

個人的には、例えば県民のグループでお茶会や芸能披露など、首里城の施設を使って自分たちの日常の活動のなかで生かせるような空間につなげられないかと思っています。王国時代の衣装を着た人たちだけがいるのではなくて、現在の県民が利用することも今後重要ではないかと思っています。

○尾澤　情報発信としては、現代の様々な技術を活かした方法があると思いますが、そのあたりはお考えですか。

○高良　ITを使ったアピールの仕方があります。首里城のイベントを動画で見ることができます。構想段階ですが、かつて首里城の王の家来達が被った「ハチマチ」の一番良い物がドイツベルリンの博物館にあります。これを動画上やバーチャル等で若い人に受けるような見せ方もこれから研究していく必要があるでしょうね。首里城でかつて使われていた物は、戦争で失われたり、海外、県外に分散したりしています。例えば徳川美術館に重要文化財級の琉球漆器があります。そういった物を持ち寄ってデジタルミュージアムのような形で今後構築していくことも大事な仕事だと思っています。首里城として実感できる物と、バーチャルで見られる物と様々な発信の仕方があるだろうと思います。

○尾澤　時代にあった発信の仕方ですね。本物を伝えるときに、その時代にあった方法を使って、いろんな方に理解してもらうことは大事なことだと思います。先生がおっしゃったように、情報は、その時その時の出し方をうまく組み合わせて出していくことも有効です。また、現代の技術をうまく取り入れて、本物でありながら、今の時代でカバーしなくてはいけないことをうまくカバーしていることがあります。これはその時代における復元の一つの道筋をつけられたと言え、本物の残し方に先鞭をつけられたんだと思います。

戦争と復元

○高良　首里城の復元プロジェクトは周りのアジアをみたら先進的な事例だと思います。アジア各地で戦争があり、歴史文化を代表する建造物が被害に遭っている。失った物にこれだけ力を入れて、しっかりとした体制で復元整備した事例は、先進事例となると思います。これを整理して周りのアジアに発信しようと議論したこともあるのです。

○尾澤　今日の話聞いて、やはり戦争という要素が入っているところは、若干抜けているのですね。戦争で全て破壊され、それを乗り越えて、更に昔の本物を復元してきた、ここのコンセプトをいかにうまく観光客にお伝えするか、ここが非常に大事なところですが、うまく伝えられるかという事ですね。

○高良　当事者としてそこをもっと理解してほしい。そこの魅力を感じてほしい。その辺のアナウンスというか説明がまだ不十分で伝わって無いかもしれませんね。

○尾澤　平和学習がひめゆりなどの戦跡だけでなくて、首里城もそれを物語っているということをうまく出せれば良いと思います。沖縄の観光にはいろんな面があって、ビーチでリゾートだけではなく、平和学習もあり、さらに歴史の中で戦争が様々な形で影響を及ぼしている。戦争ってどういうものなのだろうかっていうことも、考える部分があります。首里城は、歴史、文化さらには歴史の中でも近代の歴史の中で起こったことを併せて勉強できるという、すごく良い施設です。課題はその伝え方ですよね。伝え方を我々も考えなければならないと思います。

県立博物館との棲み分け

○尾澤　県立博物館では首里城の話が無くて、首里城一つに集約されています。観光客の方から見ていろんな場所で発信があった方が良いのではないかと思いますが。

○高良　私は県立博物館・美術館展示構想会のメンバーでもありまして、そのとき議論になりました。最終的な結論は、県立博物館の常設展示という、沖縄の古い時代から現代まで歴史を語る中で、首里城の展示コーナーを作るのではなくて首里城を中心に展開した、かつての歴史の流れを県立博物館で説明し、実際の舞台となった首里城については見に行ってくれと、そういう棲み分け的なものを行い、現在の形になりました。ただ、空港、県立博物館などでは、首里城に対するインフォメーションやアナウンスを高める課題があります。逆に首里城では他のグスクに関心を持つような取り組みをどうするべきか、という課題もあります。5つのグスクが世界遺産になっていますが、首里城にいくと他の4つのグスクについても魅力を感じられる、そういった工夫も今後必要でしょうね。

○尾澤　そういう発信のできる場所が必要ですよね。今、忠実に復元すればするほど、後からの話は入らないですよね。そこをどうやってうまく入れて、他にもつながるような整備をしていくかっていうことは難しいことですね。

○高良　そこですよね。いろんなことを伝えたいけれど、そのスペースがない。確保しようと無理をすると往時の首里城ではないものになってしまう、一種のジレンマでもあります。

首里のまちづくり

○高良　首里城公園は18haあり、そこに世界遺産が首里城と園比屋武御嶽と玉陵があります。今公園の中で県整備の部分に中城御殿の復元整備があって、さらに将来的に、北側の円覚寺や松崎馬場という昔の道路を整備して、旧博物館の跡地を整備する。そうすると一種の城下町の整備ができます。

○尾澤　もう少し首里の町作りを考えたらいいと思っています。というのは首里城の見学だけだと短い滞在時間となります。朝と夕方に来られることが多くて一杯になりますが、途中中だるみの時間があるんですね。その時間をうまく使って来園者を増やすために、町をもう少し見ていただいて、例えば半日首里で時間をとっていただける、そういう町作りをうまくできないか。首里の町そのものに昔の琉球の魂が感じられるような町作りが出来ないのかなと思います。

○高良　これがこれからの大きな課題だと思いますよ。首里城の似合う町、次長おっしゃるように滞在して、長い時間過ごせるような場所、さらに所々にスポット的に紅型を作ってみたり、泡盛の工場があったり、昔のお菓子を出してみたりと琉球的な輝き、雰囲気を持つ町。戦争で破壊される前の首里の写真を見てみると、首里城を中心とした見事な城下町となっています。今首里城の周りが連携できるような町並みが無いのです。時間をかけながら整備していく必要がありますね。

観光客1000万人時代のインフラ整備

○尾澤　観光客1000万人を実現するために必要なインフラ整備や、これを実現するための重要な視点についてご意見をお聞かせいただきたいと思います。

○高良　観光インフラ整備について提唱されていますが、二つ申し上げたい事がございます。一つは環境保全・再生の問題です。例を挙げますと、慶佐次川ではカヤックで遡行してマングローブを楽しむという本土には無い観光スポットで先端的なことを行っています。しかも地域の農家や漁業者と連携して、かなり好評です。ところが赤土が流れてきて、川が浅くなってカヤックが遡れない状況が出てきています。ただ、生態学や自然の専門家に聞くと、赤土が入ってきてそれなりの環境が出来て、そこでまた動植物が環境にあった生き方をしている。簡単に土砂を浚えば良いわけではないようです。問題は慶佐次川に象徴されるように、観光資源の環境の問題において、市町村・県・国が知恵を出し合って、それぞれの立場で今後のふさわしい保全や再生の仕方を考えなければならないことです。それが道路や滑走路にはない観光インフラとして重要な資源の問題、次長の提言でいえば観光資源あるいはそういった観光地を抱える地域の支援にあたります。こうした問題は国・県・市町村という枠組みを超えて共通の課題として時間をかけて解決していく必要があります。

基地返還による跡地の利用

○高良　もう一つは、一昨年の4月に日米で合意された、嘉手納基地より以南の米軍基地や施設の統合返還に伴い、観光という強い切り口から議論していく必要があると思います。これは、20年、30年という長期にかけて取り組むという合意がなされていますが、沖縄の中心的な場所になるため、重要なのです。ここでは、例えば将来的に滞在型、短期滞在する観光客も含め観光客を対象とした医療の様々なサービスなどが考えられます。それを含めて、観光を絡めた強い魅力的な跡地利用のあり方を、今後は、観光分野からもっと提案力を高めていく必要があると感じています。

○尾澤　まとまった跡地が出てくると、今の傾向でいくとすぐ商業施設とか、同じような物を持ちたがるので、もう少し全体を広い目で見て工夫が必要だと思います。実は今回提言をまとめたときの最初に書きました観光資源、沖縄の観光資源をもっと磨く必要があると思います。観光客1000万人に向けてUSJやMICE等、いわゆる外から持ってくるカンフル剤みたいなものですね、こうしたエンターテイメント系のものだけではなく、沖縄の本来持っているものを活かした観光資源、これを磨く必要があるのではないかと思います。今の風潮として若干議論が抜けています。基本的に観光資源はインフラが関わっています。これは我々が言わない限り、実は誰も言わないのではないかと思いました。我々が言わないとエンターテイメントのみになり、更にそのエンターテイメントを支えるための観光インフラというこういう物の見方しかなくなります。観光資源としてのインフラ、これが大事なのです。

○高良　これだけ基地の加重負担が県民から言われ続けていて、やっと日米政府で将来的に計画的に返還しましょうとなっている訳ですから、この機会をうまく捉えて返還された跡地をどう活用するかが、沖縄の将来を決めると思っています。中南部都市圏の軸にある場所ですから、まさに長期的な沖縄を見たときの投資となります。おっしゃっているように、お客さんを引っ張ってくるエンターテイメント系ではない、それも一つあってもいいのですが、少子高齢化時代の、例えばシルバー達が滞在しても面白いような町やハワイのように一週間なり一ヶ月滞在出来る町になればよいですね。そこに居て楽しく、独自性、魅力がわかる、ある期間滞在して、生活者としてのムードが味わえる、そのようなものも織り込んだ形で跡地利用を考えないといけないと思います。まさに、おっしゃっているように沖縄がもっている、原石をどうやって磨いていくかだと思いますね。

沖縄らしさを考える

○尾澤　沖縄で暮らしてみることの魅力を出さないと滞在型の観光はできないと思います。普段と違う、リゾート的な体験も大事ですが、気候も食事も違うな

かで、ここで暮らしてみることが、居心地が良く、幸せというか満足度が高い、心の豊かさを感じられる場所みたいなことを考える必要があると思います。本土と同じようになるのではなく、沖縄らしさを、もう一度この1000万人をきっかけに考えることが必要だと思います。

○高良　その象徴的なことは、例えば慶良間なんです。毎年、慶良間の阿嘉島に泳ぎに行ってますが、まさにトロピカルで本当に周りの珊瑚礁も、昨年、国立公園になりましたけど、見事な海です。ただ僕ら地元で多少、歴史と文化を知っている人間からすると、阿嘉島の集落自体が面白いんですね。ここに拝所があって、これはまさに島で生きてきた人間達の蓄積してきた観光資源だと思うんですよ。また、渡名喜島では古民家をリニューアルして滞在出来るという良いものになっています。これらは大量に来て欲しいのではなくて、そういう魅力がある島もいっぱいあって選択できるということです。様々なニーズやシチュエイションに対応できる魅力作り、それに必要な観光インフラはどうあるべきかなんだと思います。

○尾澤　実は観光とインフラ整備についてシナリオを理解していただくために、本を読んでください、HPを見てくださいではなくて、観光客もわかりやすいように、カードを発行する予定です。沖縄の観光とインフラについて、カードを集めながら楽しんで理解していただきたいと思っています。首里城、海洋博公園、ダムツーリズム、道の駅で出すつもりです。更に先ほどの渡名喜島等の離島の町作りで出せればと思っています。そうすると離島シリーズみたいな形ができ、皆さん離島に興味をもっていただけるし、行っていただけます。

観光とインフラの融合

○高良　沖縄の様々な魅力のルートを辿る、確認することになりますね。今回、この対談の企画をいただいたとき、これまで沖縄振興開発計画に基づいて沖縄の産業、生活基盤等のインフラは相当整備されてきました。それを将来に向けて観光インフラという切り口から、県民だけでなく観光客を見据えてインフラのあるべき姿まで踏み込まれた。そしてインフラ全体を見つめ直し、磨き直す、そういったことをお考えになったことは、すばらしいと思います。もう一つ、お客さんもある時期は県民とここで暮らしているわけですから、当然視野に入れた防災対策、危機管理対策は必要なのだということを提言でおっしゃっている。観光は別に特別なものでなくて、沖縄のまさにリーディング産業であれば、それを受け入れて楽しんでいただく、また来ていただくことのために、インフラというものが総力を挙げて向き合っていることだと思うんですね。そういう点では随分ソフトの分野も取り込んだ戦略になって面白いと感じました。

沖縄総合事務局　次長　尾澤　卓思

○尾澤　観光客にとって良いことは、県民にも良いことなんです。むしろ観光客の方がなれてない分だけ、丁寧に物を説明したり、誰もが使えるように、ユニバーサルデザイン的な話も含めて配慮したり、観光客への対応が難しいと思うんですよ。そこに焦点を合わせておくと県民にとってもすごく良い物ができて、観光客を対象にしながらも実は県民生活の質の向上が一つの狙いでもあります。もう一つは観光とインフラは切っても切れない物であって、観光があって、インフラがそれを支えるだけではなくて、観光とインフラは融合しているということです。インフラそのものが観光の資源だという発想が今まであるようでなかった。私としては頭の整理をきちんとして、沖縄の経済が日本のフロントランナーを目指すのと併せて沖縄のインフラが日本のインフラのフロントランナーになることを目指そうと思っています。そういう意味で提言も出し、雑誌「土木施工」にも書いて、皆さんに我々が考えていることを共有してもらうことから始め、それができれば次の新しい提言を考えていきたいですね。今日お話しさせていただいたような質問に対して、色々な方からご意見をお聞きして、まとめていきたいと思っています。

○高良　すばらしいですね。従来観光とインフラとは全く別々に議論されてきたのですが、いまや現実を見ると、インフラが新しい資源になるわけですからね。

○尾澤　インフラ整備が入って観光は磨かれて観光資源になります。観光客1000万人に向けて沖縄の競争力を強くする、またハワイに匹敵するためには、沖縄の魅力をもう一度磨く必要があると思います。

○高良　30年ほど前、沖縄コンベンションセンターを作る時に、ハワイの観光ビューローの事務局長が、「確かにハワイは観光地として世界有数の観光地であるが沖縄も磨けば沢山の資源を持っている。歴史や文化も厚いし、インフラ整備が進んで、その時の魅力とタイアップして交通の利便性も高まっていくと、ハワイに全くない物を持っている。将来、沖縄がそういう物を磨けたときに、ハワイのライバルとして強敵になる。しかしまだ沖縄は観光地として持っている沢山の魅力の引き出しの一部しか見せていない。」と興味深いことをおっしゃっていました。その土地ならではの物に手を加えて磨いて、いろいろと工夫をしていけば、面白い町になると思います。それに必要なのがまさにインフラだと言うことがよく解りました。

○尾澤　本日は勉強になりました。ありがとうございました。